

2017年度（平成29年度）慶應義塾大学日吉キャンパス 音楽関連講義・セミナー案内

慶應義塾大学日吉キャンパスでは、塾生諸君の興味や資質に併せ、導入的な授業から、かなり深い内容を扱うものまで、多彩な音楽関連の授業を提供しています。なかには、実習や実技、演習を含む音楽の授業もあり、このことは他の一般大学にない特徴です。履修者は次の各講義の要綱をよく読んで、自分にあった授業を見つけてください。

※紙面に掲載していない情報もあるため、Web上の「講義要綱・シラバス・時間割」や慶應義塾大学日吉音楽学研究室HP (<http://musicology.hc.keio.ac.jp/>) も併せて参照してください。

時限 教室	題目 / 担当教員 科目名	講義内容 担当教員からのコメント、受講条件 (※)	その他
(月) 1限 D310	I 「諸民族の伝統音楽」 II 「人間と音楽のかかわり」 尾高暁子 (商) 総合教育科目「音楽Ⅰ、Ⅱ」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	I これまで諸民族が培ってきた伝統音楽の多様な世界に目をむけよう。代表的な音楽のジャンル、芸能、宗教儀礼に伴う音響の諸相を目と耳でたしかめる。また、各民族・地域の音楽のなりたちを理解するために、音組織やリズムのあらましも探ってみよう。 II 人間にとっての音や音楽の意味、人間と音楽のかかわりの変遷をあらためて吟味しよう。何が音楽の生成や変化、淘汰に影響を及ぼしてきたのか？音楽と人間のかかわりを諸々の観点からオムニバス形式でとりあげる。 ※テキスト (春学期) : 『はじめての世界音楽』 柘植元一他編、音楽之友社、1999年、ISBN:4-276-13531-1	
(月) 2限 D310	I 「音楽学の基礎」 II 「作曲家および音楽作品の研究方法」 福田弥 (文) 人文科学持論「音楽Ⅰ、Ⅱ」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	発表を主体とする授業である。音楽をたんに感覚的に聴く対象ではなく、調査・研究の対象として客観的に捉えられるようになることを目的とする。本講座では楽譜を伴う音楽を対象とする。 I 春学期は、音楽とは何かを考えた上で、その研究方法について理解を深めてもらいたい。 II 各時代の代表的な作曲家と作品について、どのようにアプローチすべきかを考えていきたい。 文献を活用する方法を身につけ、音楽作品を客観的に記述できるようになることも目的である。 ※参考書：久保田慶一ほか1996『はじめての音楽史』音楽之友社、岡田暁生2005『西洋音楽史』 その他授業中に指示します。	
(火) 2限 D310	I 「クラシック音楽アンソロジー：都市と音楽」 II 「クラシック音楽アンソロジー：時代と音楽」 平野昭 (文) 総合教育科目「音楽Ⅰ、Ⅱ」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	春学期の音楽Ⅰと秋学期の音楽Ⅱは概ね西洋音楽史入門的な科目とする。しかし、通史でもなく、特定の時代に焦点をあてるものでもなく、音楽がいかに社会や文化と深く関連したものであるかを確認することで音楽への関心を高め、親しむことを目的とする。 I 多くのすぐれた音楽を発信したヨーロッパの都市を選んで、その地で生まれ育まれた音楽や、その町にゆかりの音楽を紹介しながら、作品の特性や様式について概説する。 II 西洋音楽史入門的な講義とする。バロック時代以降、つまり17世紀末以降の音楽を題材として、感覚的に音楽様式の違いを確認してゆきたい。	
(火) 4限 811	I、II 「バロック期と古典期の音楽：楽器と器楽作品」 石井明 (経) 総合教育科目「音楽Ⅰ、Ⅱ」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	この授業では、当時使われていた楽器を鍵盤楽器、弦楽器、管楽器に分けてそれぞれについて考察し、各楽器がどのように理解され、どのように活用され、そしてどのような社会的な役割が与えられていたのかなどを考えていきます。これらの楽器のためにどのような器楽作品が書かれていったのかということと、それらの作品が、時の経過とともにどのような発展を見せたのかということと、楽器の観点から分析していきます。 ※参考書：D. J. グラウト/C. V. パリスカ著 (戸口幸策/津上英輔/寺西基之共訳) 『新西洋音楽史』(中巻) 音楽之友社 ※後期にみに授業の履修を希望する学生は、前期の授業内容を後期開始前に把握しておくことを強く勧めます。	追加履修については、前期は原則認めませんが、後期については受け入れられます。

(火) 5限	I、II「弦楽四重奏 セミナー」 石井明(経) 自由研究セミナーa, b (※通年)	この授業は「体験導入型」であり、楽器の実演が核となっています。授業の進行の方法は、それぞれのグループに分かれて演奏していくという形態と、履修者全員が参加する、いわゆるマスタークラスとの併用を予定しています。授業の成果は、学年度末近くに演奏会という形での成果発表を予定しています。 受講対象者は、楽器を所有し(あるいはそれらに常時アクセスでき)、かつそれを演奏する能力を十分に備えている学生とします。また、グループ(4人)としての参加を希望する学生を最優先します。 履修を希望する学生は、ガイダンスに必ず出席し、そこで履修希望届を教員に提出してください。 その後、教員から履修許可証が発行されます。 履修許可がないと履修登録ができません。	履修を希望する学生は、第1回目の授業に必ず出席してください。1回目の授業で履修許可者のリストを作成します。
(水) 2限	I「オペラ史」 II「オペラ史：19世紀～ 20世紀」 福中冬子(法) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	現代の日本では、ミドルクラスの為の娯楽以上のなものでもないように見なされるに至っている「オペラ」という音楽ジャンルだが、そもそもは市民社会のための総合芸術である。 そうした「オペラ」の歴史をたどりながら、作曲家や脚本家、演奏家が、時の政治や社会状況にどのように向き合いつつ創作活動を行ってきたのか、またどのような創作美学の史的変遷が見られるのか、オペラ史上の代表作を通じて学ぶ。 I前期は最初期のオペラから19世紀イタリアおよびフランスのオペラまでを対象とする。 II後期はワーグナー以降、19・20・21世紀のオペラ作品を扱う。	
(水) 3限	I「音楽史の考え方 — 17～18世紀を中心に」 II「宗教改革、啓蒙思想と 音楽(1517～1750年頃までの ドイツを中心に)」 佐藤望(商) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	I西洋の17-18世紀の音楽史を学びます。一般に「バロック時代」と呼ばれるこの時代の音楽は一見我々の時代とかけ離れているようにも思いますが、後の音楽の屋台骨を構成するようなさまざまな考え方や技法、音楽構成原理が生み出されました。単にバロック音楽のレパートリーを学ぶだけでなく、現在の音楽生活とのかかわり、社会とのかかわりといったことにも焦点を当てていきます。 II今年2017年は、宗教改革から500年にあたります。宗教改革は、ヨーロッパが中世から近世へと移り変わる時代の大転換をもたらしました。宗教改革は人間の宗教観を転換させ、やがて人間個々人の自我の確立を導くようになります。この授業では、そうした思想背景・時代背景が生み出したさまざまな音楽を聴きながら、当時の人々がそこに込めた思いに、耳を傾けて行きます。 ※テキスト(春学期)：佐藤望著『バロック音楽を考える Rethinking Baroque Music』、音楽之友社、2017年	
(水) 3限	I「現代音楽史：19世紀～ 1945」 II「現代音楽史：戦後～ 21世紀」 福中冬子(法) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	音楽作品は作曲家個人の創造思想の結晶であると同時に、その時代の社会的、政治的、文化的様相を反映する鏡でもあります。当授業では、異なる文化ジャンル(文学、絵画、舞踊など)における潮流や歴史的、社会的な動きを視野にいれながら、複数の作曲家による音楽作品を考察します。 I前期では主に19世紀の終わりから第二次大戦終了までの時代の作品が中心となります。 II後期では主に第二次大戦終了以降に創られた作品が中心となります。 ※テキスト(春学期)『現代音楽小史』ポール・グリフィス著 石田一志訳 音楽之友社 1978年 ※参考書(春学期)『音楽の新しい地平』ロバート・モーガン著 長木誠司監修 音楽之友社 1996年 ※参考書(秋学期)『世界音楽の時代』ロバート・モーガン著 長木誠司監修 音楽之友社 1997年	
(水) 4限	I「音楽と技術(1)： 1950年代以前 - アナログの時代」 II「音楽と技術(2)： 1940年代以降 - アナログから デジタルの時代へ」 藤井孝一(文) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	Iルネサンス期の印刷技術や産業革命期の機械技術、近代の録音技術も、その時代においては最先端の技術でした。この講義では、印刷、機械、録音など、近代以降に発達した技術やメディアと音楽との関係を軸に、古代から20世紀前半にかけての西洋音楽史を概観します。 IIエレクトロニクスの発達には音楽の創作に大きな影響を与えてきました。ミュージック・コンクレートに始まる電子音響音楽(electroacoustic music)の歴史は既に60年を越えています。この講義では、第二次大戦後の音楽の諸傾向について、エレクトロニクスとの関わりを軸に解説します。 講義では、「芸術」音楽ばかりでなく、ジャズやロックなどのポピュラー音楽についても時間の許す限り触れたいと考えています。 講義で取り上げる作品の理解に必要な音楽様式や時代背景などについても詳説します。	

(水) 5限	I「合唱音楽①」 II「合唱音楽②」 ※演奏実践を含む	この授業では、古今の合唱の名曲を実際に歌うことによって、音楽の歴史の一端を体験します。 ※ガイダンス時に声を出して頂き、パート分けを行いますので、ガイダンスは前半から出席してください。 (ガイダンス時間内に終了しない場合は、別途時間を調整して指示します) ※学期の終わりに演奏会を開きます。春学期で取り上げた曲も演奏しますので、音楽II合唱音楽②(秋学期・水曜5限)とセットで履修してください。春学期だけの履修は出来ません。 ※履修許可者は共通掲示板に発表します。許可を受けた方は、必ず登録してください。 ※ガイダンス終了後、追加募集を行う場合は、第8校舎掲示板、日吉学生部掲示板、日吉音楽学研究室ホームページ http://musicology.hc.keio.ac.jp/ で告知します。	必ず春学期のガイダンスに出席し履修申し込みをしてください。
811	佐藤望(商) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)		履修許可を受けたものは必ず通年で履修すること。
(水) 5限	I、II「18世紀のオーケストラと演奏習慣」 ※演奏実践を含む	※受講対象者は、楽器を所有し(あるいは常時アクセスでき)、かつ演奏能力を十分に備えている学生 ※貸出可: コントラバス、チェロ、ナチュラル・ホルン、ナチュラル・トランペット、ティンパニ ■オーケストラ編成: 約35名 【管楽器】フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット: 各2名 【弦楽器】ヴァイオリン: 16名程度、ヴィオラ、チェロ: 各4-6名、コントラバス: 若干名 【打楽器】ティンパニのみ	※要ガイダンス出席 →履修希望届を教員に提出
DB203	石井明(経) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	1年を通して履修を希望する学生のみ履修許可を与える予定	※要履修許可証 →教員から履修許可証発行
(木) 4限	I「音楽理論入門(1)」 II「音楽理論入門(2)」	この授業では、西洋音楽における理論的基礎を、実習を伴いながら学びます。 1)教科書『和声法』(ウォルター・ピストン)に従った和声学の学習と、2)西洋音楽理論の諸問題についての講義から構成されます。各回に実習課題を課し、履修者は毎週この課題を提出することが求められます。 I和声の原則を一通り学び、簡単な四声の和声課題が実施できるようになることを目的とします。 II和声課題で使用できる和音を増やし、転調や借用和音の使用、転位・修飾を含む課題も視野に入れて学習していきます。	※要ガイダンス出席 →履修登録必須
811	佐藤望(商) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)	※必ず第1回の授業に出席し、授業内容を確認し、小テストを受け、履修の許可を担当教員から得た上で履修登録すること ※音楽I「音楽理論入門(1)(春学期)」を履修し合格したものが、音楽II「音楽理論入門(2)(秋学期)」に進むことができる	履修登録は、音楽I音楽理論入門(1)と音楽II音楽理論入門(2)を併せて行うこと
(木) 5限	I、II「音楽理論実習」	音楽理論のうち和声学習は、音楽の構造を知り、多声の論理を学ぶ上で重要な部分を占めます。 この授業では、和声の基礎知識があることを前提としてアンリ・シャランの和声課題を解いていきます。 また並行して、楽曲についてのディスカッション、音楽分析、初見練習、それぞれの楽器を用いてのさまざまな音楽演習、読譜訓練などを実践していきます。 今年度はバッハの作品を取り上げて、分析の方法を探ります。	必ずガイダンスに出席してから履修登録すること
811	佐藤望(商) 総合教育セミナーD(II類) (※通年)	※この授業は、音楽I、II音楽理論入門の既修者、同時履修者、その他の既に和声の学習を行った経験者を対象にしています。	
(金) 5限	I「笑い音楽」 II「死と音楽」	I「笑う」というのは知的な行為です。音楽に関する予備知識は必要ありませんが、作品を積極的に聞いて考える姿勢、そして様々なユーモアを理解する柔軟な頭が大切になります。 IIすべての人に平等に与えられる「死」。歴史上人々はときにそれを恐れ、逃れようとし、ときにそれに憧れ、魅了されてきました。授業は音楽作品の鑑賞が中心になりますが、死を巡る作品というのはただ聞いて美しいというだけの作品では決してありません。それぞれの時代の人々の生と死と向き合うつもりで真剣に、集中して聞いて、よく内容について考えてください。	
811	佐藤康太(商) 総合教育科目「音楽I、II」 (春学期 / 秋学期 / 通年)		

<p>(土) 1限</p>	<p>I、II「発展声楽クラス」</p> <p>佐藤望(商) 川田早苗、古川精一 身体知・音楽Ⅲ、Ⅳ (通年)</p> <p>※教養研究センター 設置科目</p>	<p>この授業の参加者は、慶應コレgium・ムジクム アカデミー・ヴォーカル・アンサンブルのメンバーとなります。このグループで日吉キャンパス協生館の音楽ホール等で、成果発表の演奏会を開きます。身体知・音楽ⅠⅡよりも、技術的に1段階上のレベルを目指します。</p> <p>※【4月8日(土) 9:00】に第8校舎 811 教室で説明会を実施します。履修者は必ず出席してください。</p> <p>※身体知・音楽ⅠⅡ(声楽クラス)と共同してアンサンブルを行います。合わせは土曜日2限の時間帯に主に行います。また、ヴォイストレーニングや、楽器・ソリスト、他クラスとの合わせの時間を別途設定します。より高いレベルをめざすこの授業の特殊性を良く理解して、履修をしてください。</p> <p>※秋学期末の演奏会準備を春学期から始めます。身体知・音楽Ⅳ(秋学期)と併せて履修してください。春学期だけの履修はできません。また、複数年の履修を推奨しています。</p>	<p>通年で履修すること (半期の単独履修は できません)。</p> <p>履修条件は身体知・音 楽ⅠⅡをすでに履修 し単位を取得したも のとす。</p>
<p>811</p>			
<p>(土) 2限</p>	<p>I「合唱音楽を通じた 歴史的音楽実践①」 II「合唱音楽を通じた 歴史的音楽実践②」</p> <p>佐藤望(商) 身体知・音楽Ⅰ、Ⅱ (通年)</p> <p>※教養研究センター 設置科目</p>	<p>合唱・声楽アンサンブル音楽の実践を行う授業です。この授業の参加者は、慶應コレgium・ムジクム アカデミー・ヴォーカル・アンサンブルのメンバーとなります。このグループで日吉キャンパス協生館の音楽ホール等で、成果発表の演奏会を開きます。</p> <p>※日吉キャンパス協生館の音楽ホール等での成果発表演奏会の準備に照準を合わせます。</p> <p>※秋学期末の演奏会準備を春学期から始めます。身体知・音楽Ⅱ(秋学期)と併せて履修してください。春学期だけの履修はできません。</p> <p>※参加オーディションについて: 【4月8日(土) 10:45~】に第8校舎 811 教室で説明会およびオーディションを実施します。履修許可者は同日に決定します。簡単な読譜能力(譜読みが自力でできること)と声の質を見ます。</p> <p>※土曜日1限の時間に身体知・音楽Ⅲ、Ⅳクラスと合同でグループ・レッスンをを行います。1限の時間に出席できる学生にのみ履修許可を出します。通常授業より一段階高いレベルをめざすこの授業の特殊性を良く理解して、履修をしてください。</p>	<p>通年で履修すること (半期の単独履修は できません)。</p> <p>追加履修許可を出す こともあるので、音楽 学研究室ホームペー ジを確認すること</p>
<p>811</p>			
<p>(土) 2限</p>	<p>I、II「古楽器を通じた 歴史的音楽実践」</p> <p>石井明(経) 身体知・音楽Ⅰ、Ⅱ (通年)</p> <p>※教養研究センター 設置科目</p>	<p>バロック・ヴァイオリン、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロ、バロック・オーボエ、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、一般的に古楽器と呼ばれている楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の目的です。トリオソナタなどの室内楽編成と、より大ききなアンサンブルであるバロック・オーケストラ(20人程度)双方の観点から音楽作品に取り組んでいきます。なお、使用ピッチはa=415となります。</p> <p>※複数年履修することができる学生を主に対象として履修者を募ります(2年目以降の単位は基本的に「自由科目」扱いになります)。</p> <p>※楽器については、塾で所有している楽器を貸与しますが、数に限りがあり、大半の楽器は昨年度からの継続履修者にすでに貸し出されています。したがって、履修希望者に楽器を貸与できないことがあります。その場合、履修は許可されません。</p> <p>一方で、バロック楽器を自身で所有している学生は、特に歓迎いたします。</p>	<p>履修希望者は必ず第1 回目の授業(Web履修 申告終了前に行われ るガイダンス)に出席 すること</p> <p>ガイダンスにおいて 出される履修許可が ないと履修登録はで きません</p>
<p>DB203</p>			